

史跡 国泰寺跡 III

平成11年度 発掘調査概要報告

2000. 3

北海道厚岸町教育委員会

序

史跡国泰寺跡は、近世東蝦夷地の歴史を伝える道内でも数少ない文化財で、昭和48年10月29日に国の史跡に指定されました。昭和60年の本堂及び庫裡・住宅の改築により景観の変化は見たものの、境内はよく当時の佇まいを残しており、観光客による賑わいを見せています。

平成4年から史跡整備に関わる委員会を組織し、管理や整備についての基本方針が示されており、その報告を基に昨年度から発掘調査を実施しております。

昨年度の調査では、調査区域が現境内地の隣接地ということもあって、直接国泰寺に関わる遺構は検出されませんでした。4000点を越える陶磁器類などの遺物や道路に付随すると見られる溝状遺構が確認され、幕末から明治期にかけての貴重な資料を得ることができました。

今年度は、境内地内における溝状遺構の延長部分の調査を中心に実施し、境内地の範囲を推定する遺構が確認されました。今後も境内地の調査を継続し、国泰寺跡の史跡整備を実施していく所存でありますので、一層のご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、この事業を実施する上で、多大なご指導ご助言をいただいた諸機関・諸氏に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成12年3月

厚岸町教育委員会教育長 小野寺 英樹

例 言

1. 本書は、史跡国泰寺跡保存整備計画に基づく遺構確認調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は、平成11年6月29日から7月27日にかけて実施し、引き続き平成12年3月31日まで整理作業を行った。

3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	厚岸町教育委員会	教育長	小野寺英樹
事務局		生涯学習課長	板橋正樹
		海事記念館館長	湯浅哲人
		管理指導係長	阿部勝治
		文化財係主事	小林 彰
調査担当者		学芸員	熊崎農夫博
調査指導者	釧路市埋蔵文化財調査センター所長補佐		西 幸隆
調査参加者	飯島 聡、武田真樹（北海道教育大学教育学部釧路校） 小林吉男、宮原美代子（教育委員会）		
作業員	川村哲司、北本浩之、須見伸一、布川将人、涌井令子、渡辺裕子		

4. 本書の編集、執筆、写真撮影は調査担当者があつた。
5. 調査、整理作業にあたっては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。
文化庁、北海道教育委員会、北海道教育庁釧路教育局、釧路市埋蔵文化財調査センター
釧路市立博物館
松浦暢道（国泰寺住職）、佐藤有紹、眞壁智誠
6. 調査によって得られた資料、諸記録は厚岸町教育委員会が保管する。

目 次

本文目次

I. 調査の目的	2	4. 遺 構	5
1. 調査の目的	2	5. 遺 物	9
II. 調査の内容	2	III. まとめ	14
1. 地形と現況	2		
2. 調査区域と調査方法	2		
3. 層 位	5		

図目次

図1 国泰寺の位置	1	図5 平成10, 11年度遺構配置図	7
図2 国泰寺周辺の現況と調査区域	3	図6 釧路国厚岸泰禅寺の真景	14
図3 調査区	4	図7 現今境内略図	15
図4 溝状遺構及び土留め板平面図	6		

表目次

表1 出土遺物一覧	10	表2 出土銭貨一覧	10
-----------	----	-----------	----

写真目次

写真1 陶磁器類(碗・蓋・皿)	11	写真11 遺構検出状況	19
写真2 陶磁器類(皿・徳利・播鉢)	12	写真12 完掘状況(南西側より)	20
写真3 陶磁器類(甕)・鉄製品・銅製品	13	写真13 完掘状況(北東側より)	20
写真4 調査前状況(北東側より)	16		
写真5 調査前状況(南西側より)	16		
写真6 トレンチ掘削状況	17		
写真7 土層断面実測状況	17		
写真8 調査風景	18		
写真9 調査状況	18		
写真10 溝状遺構及び土留め板検出状況	19		

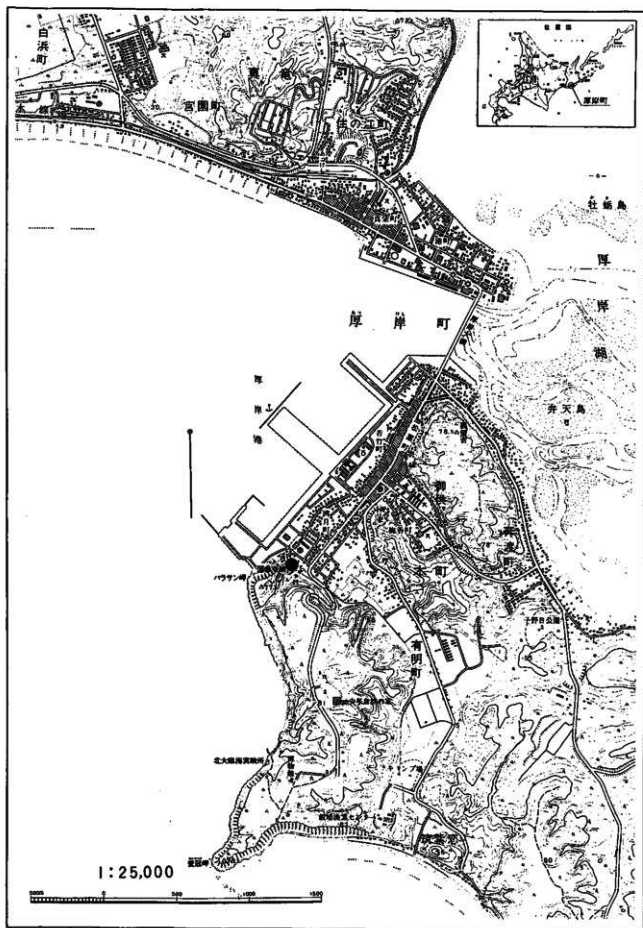


図1 国楽寺の位置

I. 調査の目的

1. 調査の目的

史跡「国泰寺跡」は、厚岸町湾月町1丁目に所在し、昭和48年10月29日に国の史跡に指定された。その後、老朽化した本堂・庫裡の改築工事の決定を機に、かつての国泰寺の位置を明らかにするための発掘調査が昭和59年に行われ、約500点の遺物と礎石及び配石遺構が検出された。

その後、史跡の一部公有地化を契機に平成4、5年に保存管理計画を策定し、引き続き保存整備基本計画の策定により史跡地の整備方針が定まった。

それを受けて整備に先立つ遺構確認及び範囲確認調査を平成10年度に実施し、約4000点の遺物と溝状遺構を検出した。今回の調査は、昨年度に引き続き溝状遺構の延長部分及び門柱跡の確認を目的として、史跡の現状変更の許可を得て当該地の発掘調査を実施することとなった。

II. 調査の内容

1. 地形と現況

国泰寺の境内は、標高3～4m前後の低地平坦面と沢側に約1mの段差を持つ標高5～7m前後の平坦面の二面からなっており、前者は創建以降の本堂が建て替えられたとみられる場所で、昭和59年の発掘調査で配石遺構や礎石が確認されている。また後者には現本堂・庫裡が建てられている。

今回の調査区域は、現境内地の北西側の標高3～4mの平坦地であり、仏牙舍利塔の裏側から海側にかけての部分で、北東側は側溝によって区切られており、南東側には小砂利を敷きつめた散策路が通っている。戦後境内地の整備のために盛土したと言われているが、位置や高さについては不明確である。

2. 調査区域と調査方法

グリッド設定にあたっては、町道湾月町横1の通りを基準とした昨年度の5m×5mの小発掘区を延長して、発掘区をカバーすることとした。小発掘区は、北西から南東方向へA～Jライン、北東から南西方向へ10～16ラインを設け、北西隅の杭を基準としてA10、A11・・・グリッドと呼称した(図3)。

当該地区は、昨年度の発掘調査で検出された溝状遺構の延長線上にあたり、溝状遺構の検出が予想されたが、境内地に植えられた種々の樹木に遮られ面的に追求する事が困難な状況で、短期間の調査ということで北西～南東方向に幅約1mのトレンチを数カ所設定することとした。

当初F11～H11グリッドに長さ10m、C12～J12グリッドに35m、D13～I13グリッドに25m、

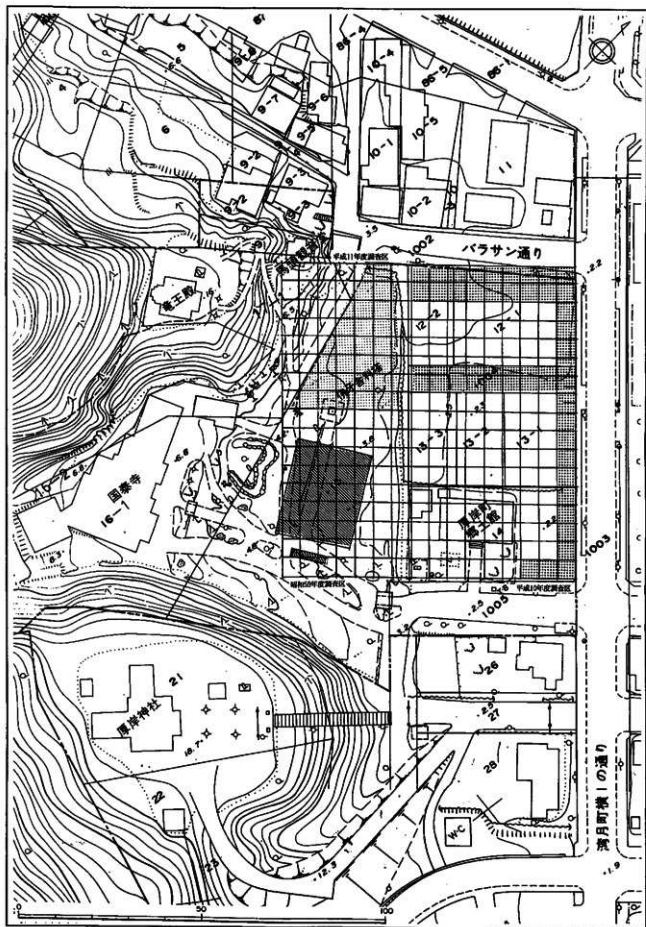


図2 国泰寺周辺の現況と調査区域

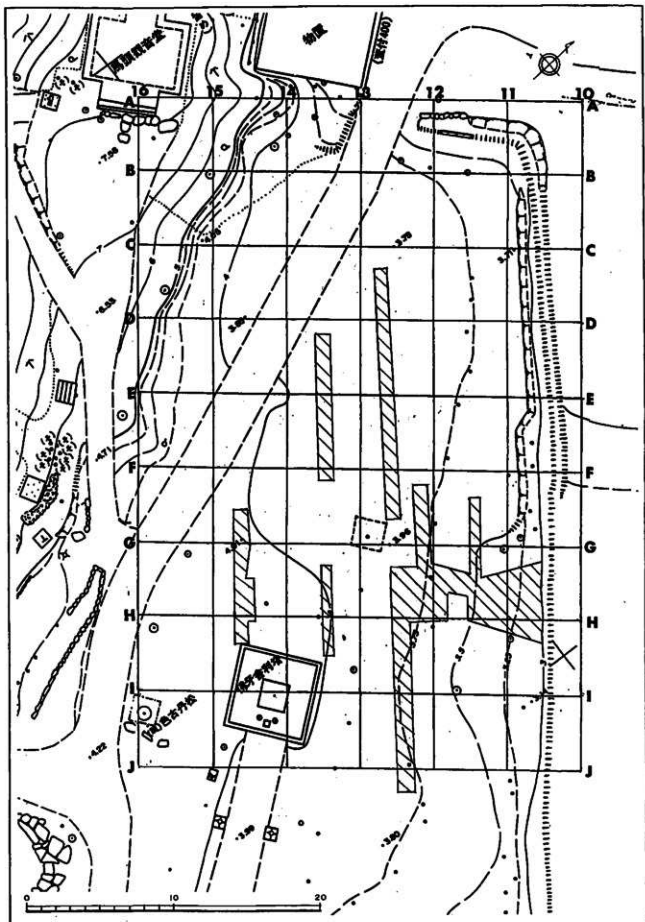


図3 調査区

F14～H14グリッドに10mのトレンチを設定したが、G12・13グリッド交点に藤棚があり、それを避けての掘削となった(図3)。

調査区の表面については、昭和59年度の土層断面図を参考に約50cmを重機で除去する予定であったが、思いのほか盛土が厚く1m以上の箇所もあったので、昨年のI層にあたる直上まで重機で上面を剥取し、その後手作業で慎重に掘り進めた。

発掘調査は昨年同様沢水の流入に悩まされ、その除去に多くの日数を要し一部調査ができない部分もあったが、最終的な調査面積は約110㎡であった。

遺構及び遺物については、1/20の図面に出土位置、レベル、種別等を記録し取り上げた。盛土及び攪乱部分の遺物はグリッドごとに一括して取り上げた。

写真撮影は、主要な遺構・遺物、調査状況、遺跡風景等をモノクローム、カラー、リバーサルフィルムにて適宜実施した。

遺構確認後、重機により埋め戻しを行った。

3. 層位

調査区域内における層序は、人為的攪乱が多く各区により一定ではなかったため、ここではF12～H12グリッドについて概説する。

地表面から50～60cmの厚さで小礫を含む灰褐色土、その下に部分的に10cm程度の厚さの黄褐色土と約5cmの厚さの極暗褐色土、さらにその下に約20cmの厚さで暗褐色土が検出された。この下層の土色が昨年度検出したI層と類似していたが、遺物により戦後の整地による二次堆積土であることが判明した。さらにその下の層を確認したところ、5～10cmの厚さで灰褐色土、その下に約5cmの厚さで黒褐色土、その下層に暗褐色土が堆積していたが、一部灰黄褐色を呈する部分も見受けられた。最下層は色調より昨年度のI層に該当すると思われる。

各トレンチについても二次堆積土が厚く堆積しており、その下層は若干の変化はあるものの前述の層位が検出されている。この二次堆積土は、昭和30～40年代に道路改良工事による残土を搬入したものである。

4. 遺構

今回の調査では、国泰寺に直接関わる遺構は検出されなかったが、G10～12グリッドで溝状遺構及び土留め板を検出した(図4)。溝状遺構は長さ約9m、幅90～120cm、深さ20～40cmで北東側は境内地を区切る側溝によって切られおり、南西側のG12ラインを中心として土留め板が検出された。板は長さ230cm、幅60cmの溝の両側にあり、長さ90～130cm、厚さ5～7cmのものが2～3枚連続して縦に入れられており、板を固定するために径5～8cmの杭が北西側に5本、南東側に4本打たれていた。土留め板及び杭の材質はオンコ(イチイ)であり、腐食に強い樹種を選んだものと思われる。

土留め板より70cm南西側に径約30cmの偏平な石1個と更にその南に20cm程度の偏平な石が2個出土した。また、G14グリッドでも径30cm程度の偏平な石2個が確認され、位置的に溝状遺構と連続する可能性を示唆している。

F11グリッドでは、溝状遺構より370cm北西側に径10～20cmの偏平な石8点が集中して検出され、

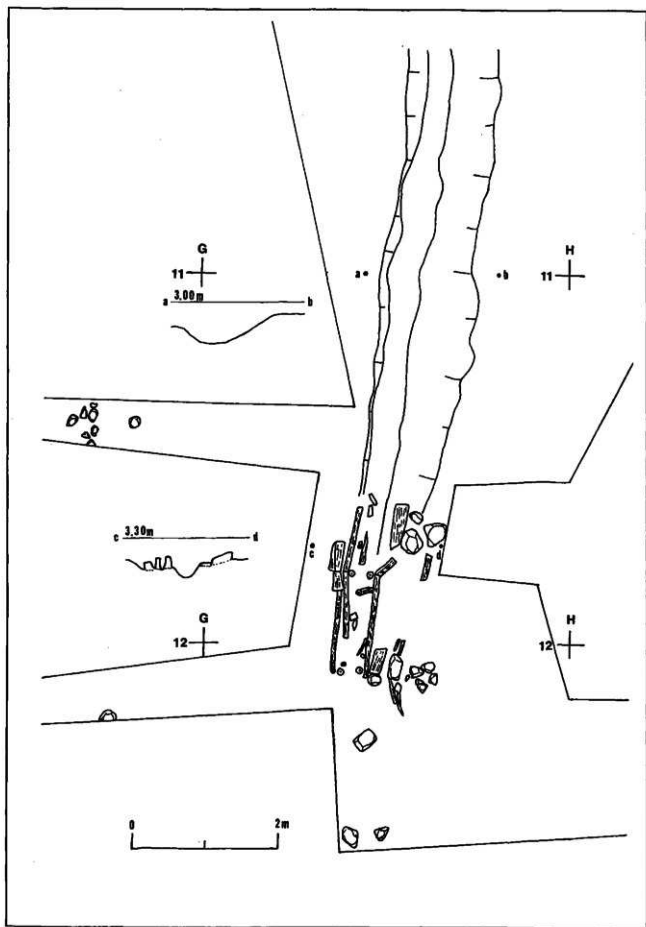


図4 溝状遺構及び土留め板平面図

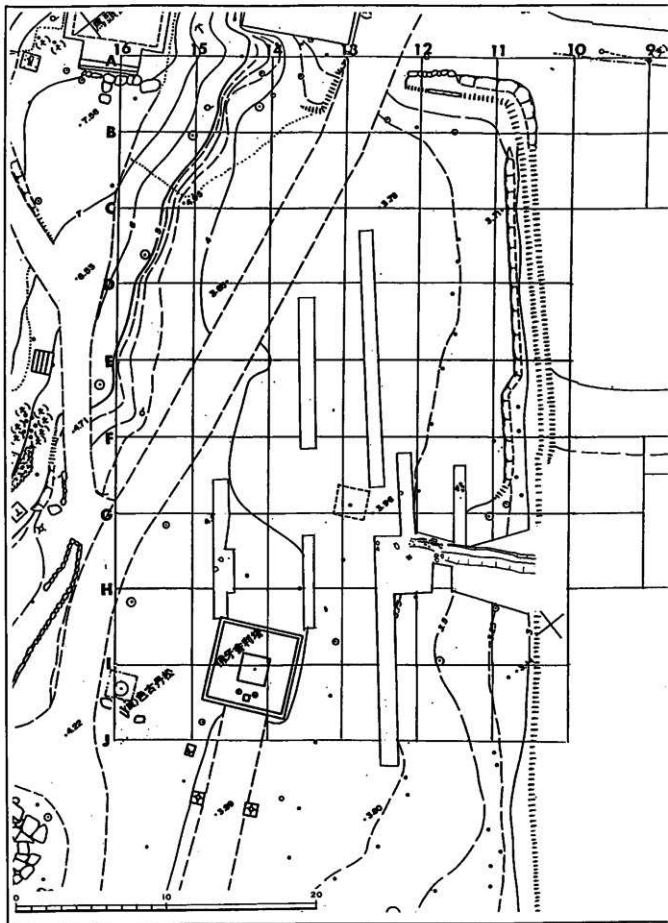
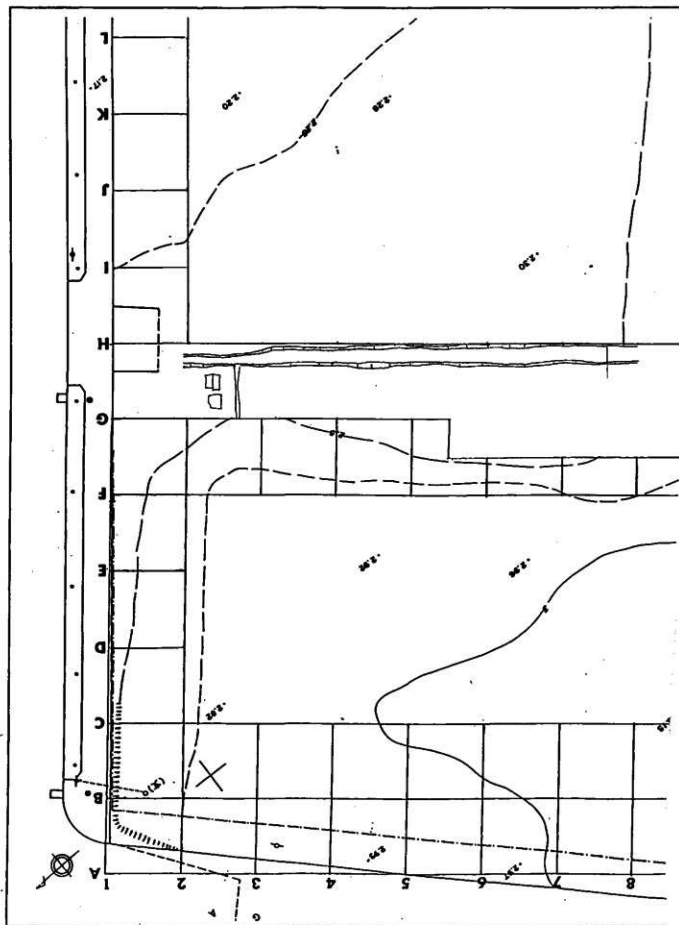


図5 平成10, 11年度遺構配置図



さらにその南西側のF12グリッドからも同様の石が検出された。これらの石の下からは水が染みだしており、その下部を確認することはできなかった。

溝状遺構の構築時期は、溝底部の遺物より明治期以降の可能性が高い。

5. 遺物

今年度の調査で出土した遺物は903点であり、陶磁器類、古銭、金属製品、ガラス製品、木製品、石製品、土製品、動物遺体等であるが、その5割が陶磁器類、3割がガラス製品であった(表1)。

陶磁器類には、碗・皿・徳利・猪口・湯呑み・鉢・播鉢・甕・井・土瓶・仏花瓶などがある。いずれも破片で完形のは少なかつたが、大部分は近・現代のものである。

近世・近代と思われるものの中で、碗は染付磁器の飯茶碗が数個体出土している(写真1-1~4, 6~10)。1は、口径9.1cm、高さ5cm、高台径4.1cmである。他は口径等明確ではなかつたが、瀬戸・美濃系と肥前系が出土している。蓋は、口径9.6cm、高さ2.7cm、高台径3.9cmのものが1点出土している(写真1-5)。皿は陶器の小皿(写真1-11~13)、磁器の中・大皿(写真1-14~16)と所謂三平皿(写真2-1~5)が出土している。11は口径11.5cm、高さ2.7cm、高台径6.1cm、12は口径11.0cm、高さ2.5cm、高台径5.3cm、13は口径10.6cm、高さ2.4cm、高台径5.0cmで見込みに蛇の目軸はぎが見られる。磁器の皿は絵柄が昨年度出土のものに類似しているが、接合するものはなかつた。三平皿は1が口径14.6cm、高さ4.2cm、高台径8.9cmである。2~5は岐阜県駄知窯産である。徳利は通い徳利と爛徳利が出土しているが、全て破片である(写真2-6, 7)。播鉢は7個体分が出土しているが、陶器で鉄軸が掛けられ櫛描きは密なものが多い(写真2-10~14)。甕は斗甕が3個体分と破片十数点が出土しているが、欠損部分が多く完形には至らなかつた(写真3-1~3)。他に土瓶・段重・盃等が出土しているが破片である。

金属製品には鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品は、釘、船釘、鋸、鎌が出土している。釘は角釘で4~15cmのものが6点、船釘は8~16cmのものが3点出土している(写真3-4~8)。鋸は長さ19cmで断面長方形のものが2点出土している。

銅製品はキセルの雁首と吸口(写真3-11~12)、おせん、小鉤等であり明治期以降のものと思われる。古銭は、寛永通宝が1枚と1銭銀貨1枚が出土している(表2、写真3-9, 10)。寛永ガラス製品は、ビール瓶、ワイン瓶、一升瓶、薬瓶等の瓶類が大半を占めている。中でもビール瓶と一升瓶が多く見られる。

以上が遺物の概略であるが、陶磁器類については次年度鑑定を行う予定である。

	点 数	備 考
陶 磁 器	485	陶器、磁器
陶 製 品	8	罨子
土 製 品	2	
ガラス製品	328	ビール瓶、一升瓶
鉄 製 品	61	釘、鋸
銅 製 品	12	古銭、キセル
木 製 品	2	
石 製 品	1	硯
動物依存体	4	鹿骨
合 計	903	

表1 出土遺物一覧

銭 貨 名	鋳造期間	時 代	グリッド	備 考
寛永通宝	1636~1869	江 戸	H11	銅銭、錆化
桐一銭青銅貨	大5~昭13	大正~昭和	H11	大正9年

表2 出土銭貨一覧

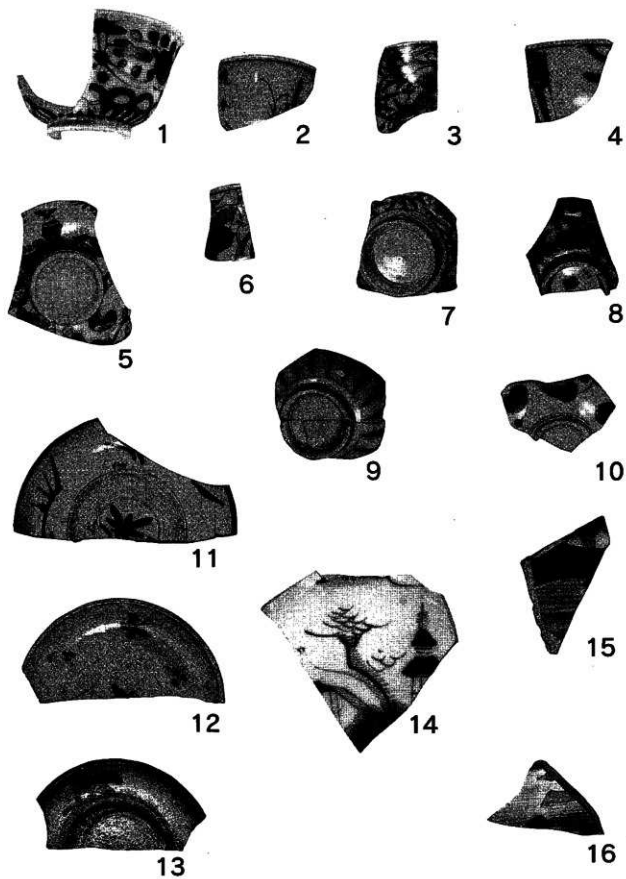


写真1 陶磁器類 (碗・蓋・皿) : 1/2

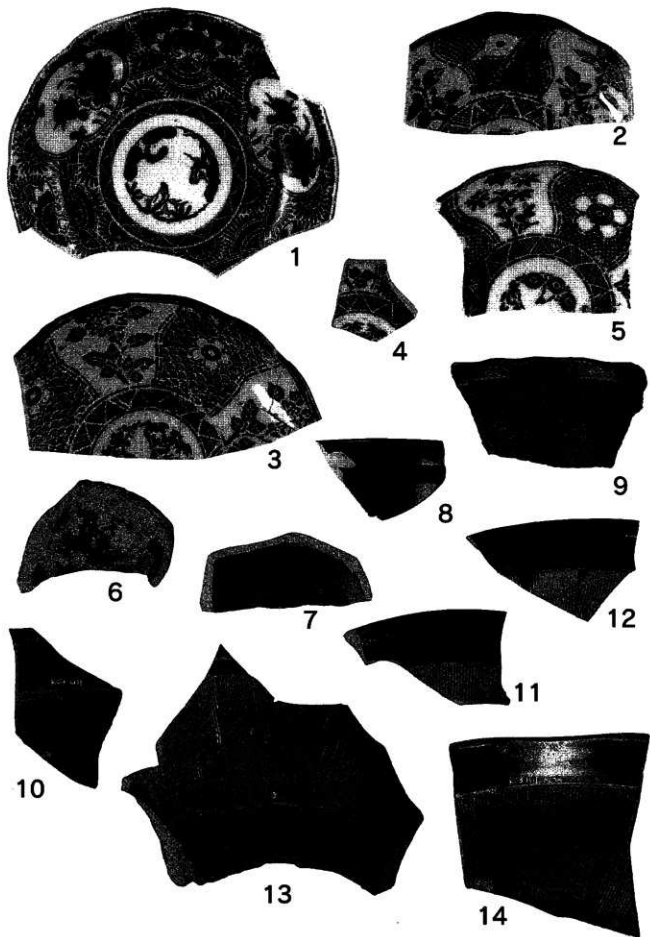


写真2 陶磁器類 (皿・德利・搦鉢) ; 1/2

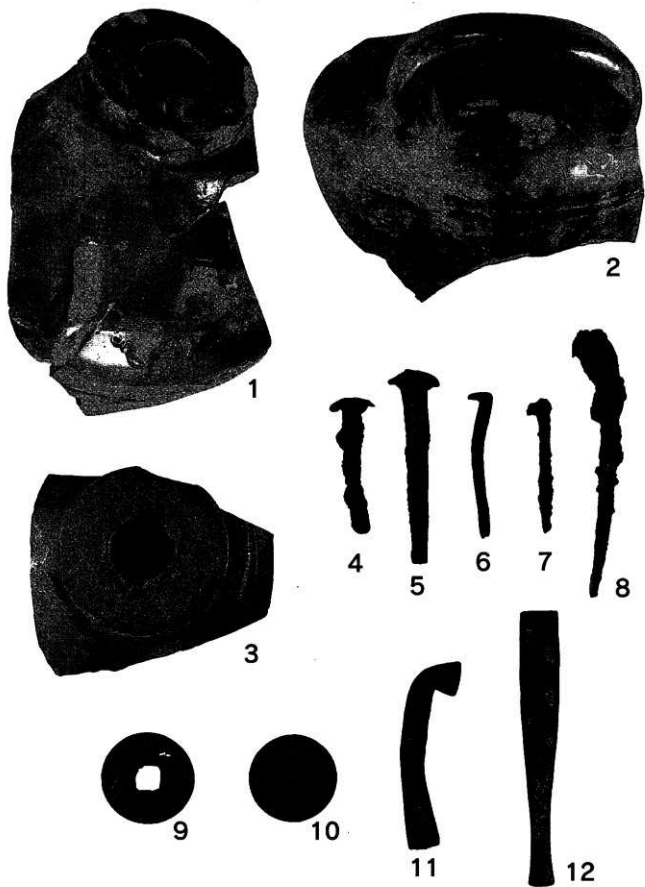


写真3 陶磁器類(裏(1/3)・鉄製品(1/2)・銅製品(1/2))

Ⅲ. ま と め

今回の調査は、昨年度に引き続き国泰寺境内の範囲確認及び遺構確認を主目的として実施したが、国泰寺創建に関わる遺構は確認されなかった。調査期間及び境内地に存在する種々の樹木や沢水の流出等により満足は行かぬ調査とはならなかったが、昨年度の溝状遺構の延長部分と土留め板の検出により、明治期とみられる境内地の範囲を推定する資料が断片的ではあるが整ってきた。

図4で示したようにH11・G11グリッドで確認された溝状遺構及び土留め板については、北大附属図書館蔵の「国泰寺境内」の写真(史跡国泰寺跡Ⅱ参照)の手前に写っている橋の下部にあたる部分とみられる。これは前述の写真と図7に示した「現今境内略図」(厚岸町郷土館蔵)を比較した結果、本堂入口の延長上に側溝を渡る橋が認められることと、昨年度の溝状遺構及び今年度の溝の延長線上の各トレンチで土留め板が検出されなかったことから推測されるものである。また、溝状遺構の370cm北西側に集石があり、境内を区切る側溝の側面にも幅約90cmで水が流出している箇所が見受けられた。この集石と流水箇所を結ぶラインが明治44年に実測された土地連絡図(『史跡国泰寺跡Ⅱ』図7)に示されている4間道路の北西側に相当することからバラサン峠に通じる道路の存在も予測させるものである。

また、今回は現地表面から約1m下位に当時の地表面が存在することが確認されたが、昭和59年度の調査で検出された集石や礎石が現地表面より約50cm下部であったことから、境内地に高低差が認められた。今後さらに、境内地と溝との関係を追求していくことで、松浦武四郎の『三航蝦夷日誌』にある「景運山国泰寺 運上屋の上なる山ニ建てたり。」との記述についても検討していかなければならない。

陶磁器類等の遺物についても、今まで出土した遺物との接合等を含め国泰寺全体及び会所等との関連を考慮しながら、産地同定や鑑定を進めていくことで、幕末から明治期の生活の様子を解明していきたい。

『日鑑記』を初め国泰寺に関する史料は決して少なくはない。しかし、明治維新により官寺としての役割を終えた後、激変する時代を乗り越えてきたことにより、明治以降の資料は数少ないものとなっている。

この発掘調査によって、それらの資料が充実していくことで、歴史公園としての整備が進められ、文献と出土資料との検討によって国泰寺の歴史的役割の理解がさらに深められるものと言える。

景運之寺禪臺即岸厚國路銅



図6 銅路国厚岸泰禪寺の真景

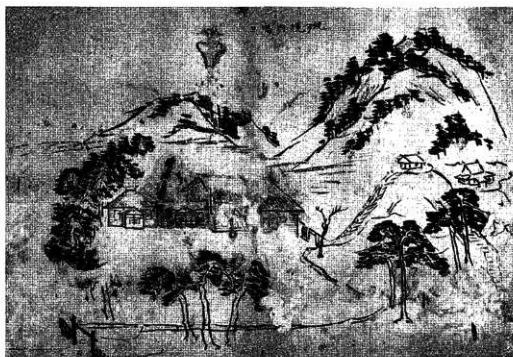


図7 現今境内略図

引用・参考文献

- 1890 高崎龍太郎著『北海立志図録』北島社
- 1975 厚岸町史編纂委員会編『厚岸町史』上巻 厚岸町
- 1981 松下亘他「駄知産三平皿について」『北海道開拓記念館研究年報』第9号 北海道開拓記念館
- 1983～1986 財団法人北海道埋蔵文化財センター編『史跡 松前藩戸切地陣屋跡』上磯町教育委員会
- 1984 浜益村教育委員会編『荘内藩ハママシケ陣屋跡の調査』浜益村教育委員会
- 1985 西 幸隆・松田猛編著『史跡 国泰寺跡』厚岸町教育委員会
- 1985 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅲ』白老町教育委員会
- 1986 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅳ』白老町教育委員会
- 1987～1988 佐藤一夫編著『弁天貝塚Ⅰ～Ⅱ』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 1989～1993 宮 宏明他『大川遺跡発掘調査概報Ⅰ～Ⅳ』余市町教育委員会
- 1990 函館市教育委員会編『特別史跡 五稜郭 箱館奉行所跡発掘調査報告書』函館市教育委員会
- 1992 北海道大学附属図書館編『明治大正期の北海道(写真編)』北海道大学図書刊行会
- 1992 松前町教育委員会編『史跡 福山城Ⅸ』松前町教育委員会
- 1994 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存管理計画策定事業報告書』厚岸町教育委員会
- 1996 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存整備基本計画報告書』厚岸町教育委員会
- 1996 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡環境整備事業報告書』白老町教育委員会
- 1998 宇田川洋・豊原照司著『元村遺跡』標茶町教育委員会
- 1999 岡田淳子・宮 宏明編『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
- 1999 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡Ⅱ』厚岸町教育委員会

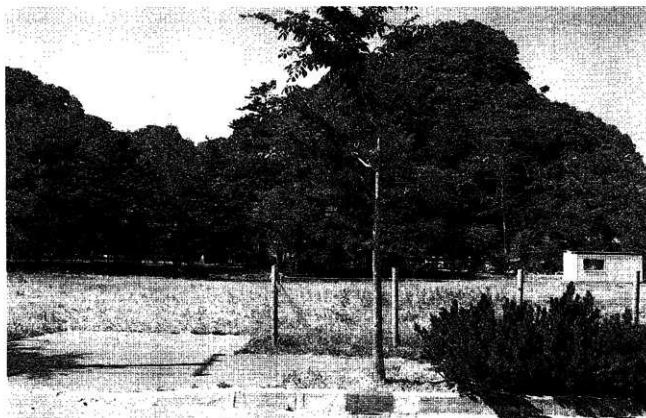


写真4 調査前状況（北東側より、手前が昨年度調査区）



写真5 調査前状況（南西側より、仏舎利塔裏側部分）



写真6 トレンチ掘削状況（北西側より）



写真7 土層断面実測状況（グリッド）

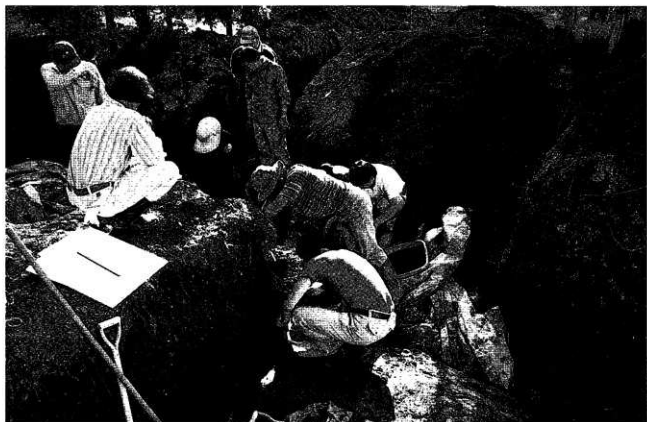


写真8 調査風景



写真9 調査状況（遺溝検出状況）



写真10 溝状遺構及び土留め板検出状況（北西側より）



写真11 調査状況（遺構検出状況）



写真12 完掘状況（南西側より）



写真13 完掘状況（北東側より）

報 告 書 抄 録

書 名	しほこかい紀 史跡 国 泰 寺 跡 III
副 題	平成11年度発掘調査概要報告
編 著 者 名	熊崎農夫博
発 行 機 関	北海道厚岸町教育委員会
所 在 地	北海道厚岸郡厚岸町字真栄町1条2番地1
発行年月日	2000年3月31日

遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しほこかい紀 国泰寺跡	あつしちやう 厚岸町 むげつちやう 湾月町1丁目 15番地	M-03	7 4	43° 01'	140° 50'	1999年 6月29日 ～ 7月27日	㎡	遺構確認 調査

遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
国泰寺跡	史 跡	江戸後期 近 代	溝状遺構	陶磁器 金属製品 ガラス製品 石製品	

史跡 国泰寺跡Ⅲ

平成11年度

発掘調査概要報告

発行 平成12年3月31日

発行者 北海道厚岸町教育委員会

印刷 有限会社 厚岸印刷